

ドナウ の 四季

2016年・春季号・No.30

2016年オスカー賞受賞「サウル(シャウル)の息子」	盛田 常夫	1
現代における茶道文化の浸透	瀬川 隆生	2
Visegrad Group 25周年記念コンサート	瀬川 知恵子	4
恋はわりなき、はかなきもの — 岸恵子の恋物語を読む	盛田 常夫	6
日本語の授業をのぞいてみませんか	内川 かずみ	8
読むことは旅をすること—文学の力	ダルミ・カタリン	10
私は日本で天職を見つけたかも	ヤカブ・リッラ	11
大切な思い出	ズヴォドニィ・ヴィヴィエン	12
留学生自己紹介	原口 祥司	14
	田中 ちひろ	15
みどりの丘補習校 上杉 なつき・桑名 真生・坂井 香里奈・横田 阿檀		16
リスト音楽院ディプロマコンサート		18
お知らせ		19
日本人学校	原田 康平・高橋 勇吹	20

2016年オスカー賞受賞「サウル(シャウル)の息子」

盛田 常夫

この映画では特殊な撮影手法が使われている。始まりのスクリーンにはぼやけた映像が映し出され、次第に主人公の姿だけが鮮明に浮き出る。この映画の撮影では1台のカメラしか使われておらず、それが全編を通して、主人公サウルの背後あるいは横、正面を映し出すだけだ。主人公の映像は鮮明だが、サウルの周辺の映像は常にぼやけている。どこに居て何が起こっているかは分かるが、周辺の状況に焦点が当たっていない。鮮明な画像は常に主人公の近傍だけで、あとは不透明な背景に閉じ込められている。いわば1人舞台のような、1人称の映画と言ってよい。

映画制作予算の節約という意味がないわけではないが、こうしたカメラワークはこの映画の制作の考えにもとづいている。この映画はアウシュヴィッツのいろいろな場面を見せてはいるが、それは主人公が動き回る背景的な舞台にすぎない。主題はあくまで1人の主人公の一手一投足であり、彼の息遣いである。主人公1人を近接した撮影で焦点を当てることによって、彼の心理状態が感じられ、息遣いが聞こえてくる。

このようなカメラワークは聴衆に苦痛をもたらす。主人公が目で見える大きな画面が、激しく動くと、映像を見る聴衆は目が回りそうな不快な気分になる。心地よい状態で映像を見ることができない。それはそうだろう。舞台は収容された100万人以上ものユダヤ人が虐殺された場所だ。その舞台を心地よく見てよいはずがない。聴衆も舞台の背景を想像しながら、主人公の息遣いを感じて苦しまなければ、この映画を観たことにはならないのだ。ポテトチップスを食べ、コーラを飲みながら見る奇想天外の娯楽映画とは違う。

もう一つの特徴は、映像を飾る音楽が一切ないことである。あたかもドキュメンタリーをみているがごとく、すべての音は周囲の環境から発せられる声や叫び、雑音のみである。アメリカの娯楽映画の世界とは天と地ほど違う、現実の人間の営みが映し出される。

(もりた・つねお

「ドナウの四季」編集長)

でも、それに自らの解放を賭けているわけでもない。たまたま、ガス室から運び出された死体の中に、息をしている男の子を見つける。ドイツ人医師は診断の後、子供の口をふさぎ窒息死させた。子供の死体は解剖するために診療室へと運ばれたが、サウルは診療室に入り込み、子供を見つめる。そこへ入ってきた医師に問い詰められる。サウルはその子を息子だというのが、映画を見る限り定かではない。自らの分身をその子に見たのかもしれない。

その医師も同郷のハンガリー人だと分かり、子供の死体を秘匿するように頼む。サウルはとにかくその子をユダヤ教の儀式に従って葬ってやろうとして、狭い収容所の一角を奔走する。

サウルは子供をユダヤの儀式にしたがって祈りをあげ、火葬ではなく、土葬にしたいと望む。そのために、収容所に連行されてガス室へ向かう行列のなかから、祈りの儀式を行うラビ(ユダヤ教の宗教者)を探すのに必死になる。この混乱のなかで、蜂起の準備用に女囚から受け取ったダイナマイト粉を落としてしまう。サウルは蜂起より埋葬に心を奪われていた。

翌朝、密かに死体を布袋に入れて外に運び出し、土中に埋めようとするが、その瞬間にSonderkommandの蜂起が始まる。サウルは子供の死体を包んだ布袋を背負い逃亡する。逃亡の途中で穴を掘り、男の子を土葬しようとするが、追っ手が迫り、埋葬を諦め、川を泳いで向こう岸に渡る。しかし途中で布袋が手から離れ、流されてしまう。自らも溺れそうになるが、一緒に逃げた同僚に助けられ、向こう岸にたどり着く。小さな森の小屋で一休みするが、突然、サウルの眼前に一人の男の子が現れる。男の子がすぐに森に戻った後に、追手の銃声が鳴り響き、映画は終わる。

サウルが最後に見た男の子は幻想だが、埋葬しようとした男の子は息子ではなく、自らの分身だったのではないか。蜂起の準備を忘れるほどに、懸命に埋葬の祈りを準備し、土葬にこだわったのは、自らの死に場所を探したからではないか。

特殊な撮影手法

巻頭エッセイ

温熱治療のパラダイムを転換する

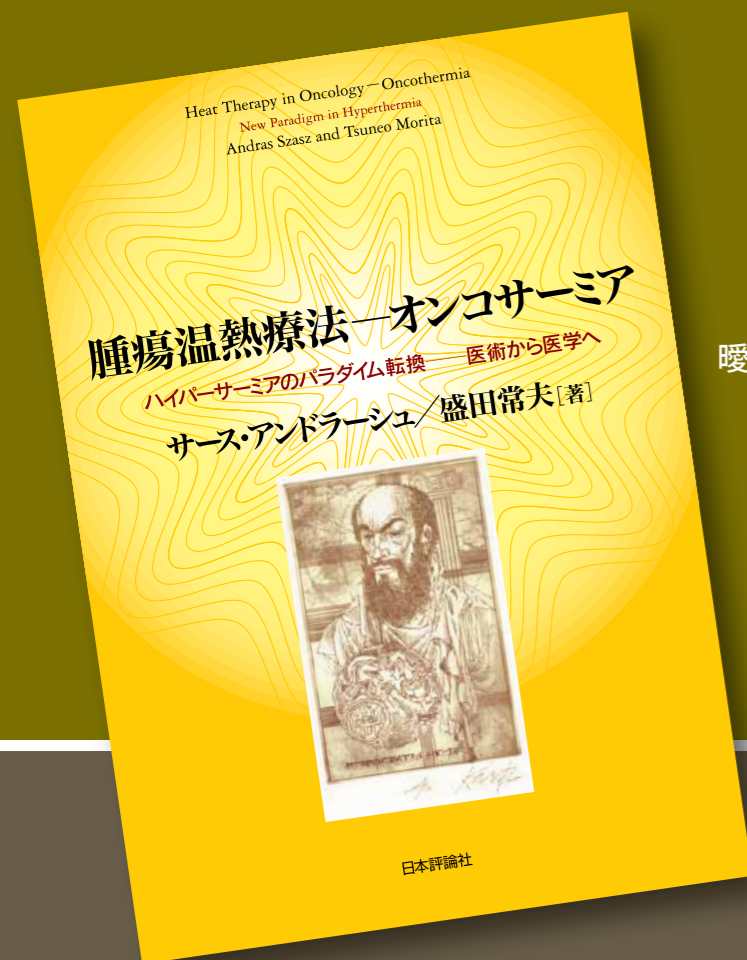
温熱治療を根本から見直し、
あるべき手法を示した著書。

曖昧な日常知を科学によって解明した画期的な著作。

オンコサーミア治療器は世界25カ国で利用。
ドイツでは百か所以上のクリニックで、
韓国の主要な大学病院に設置。

好評発売中。定価3200円+税。
大手書店、Amazonにて購入可。

- 第1章 ハイパーサーミアの歴史と評価
- 1.1 ハイパーサーミアとは何か
 - 1.2 ハイパーサーミアの曖昧さと課題
 - 1.3 ハイパーサーミアの歴史的概観
 - 1.4 腫瘍治療のハイパーサーミア
- 第2章 ハイパーサーミアの物理学
- 2.1 電磁気学の基礎概念
 - (1) 電磁気現象
 - (2) 電場と磁場
 - (3) キャパシタ
 - (4) 位相シフト
 - (5) インピーダンス
 - (6) 電磁波
 - 2.2 バイオ電磁気学
 - (1) 電磁波スペクトル
 - (2) バイオインピーダンス
 - 2.3 「非熱」効果
 - (1) 非温度依存 (NTD) 効果
 - (2) 電磁場におけるNTD効果
 - (3) 電磁気による目標選択
 - (4) 電磁気と生体システム
- 第3章 ハイパーサーミアの生理学
- 3.1 生体におけるエネルギー、熱、温度
 - 3.2 生体における温度制御
 - 3.3 生体の加熱と体温
 - 3.4 加熱による温度の分布
 - 3.5 全身加熱と局所加熱の本質的な差異
 - 3.6 加熱と冷却: リスクとその回避
 - 3.7 温度測定と熱積算量 (ドーズ)



- 第4章 腫瘍温熱療法
- 4.1 腫瘍温熱治療の基本概念
 - 4.2 ハイパーサーミアの手法
 - 4.3 熱の作用と併用効果
 - (1) 熱と血流
 - (2) ハイパーサーミアの併用効果
 - 4.4 ハイパーサーミアの熱生成
 - (1) アンテナ放射
 - (2) 磁場 (コイル)
 - (3) 容量性カップリング
 - (4) 伝導加熱
 - 4.5 ハイパーサーミア治療が抱える問題
- 第5章 オンコサーミアの理論と方法
- 5.1 電場の利用
 - 5.2 細胞燃焼
 - 5.3 腫瘍治療における細胞加熱
 - 5.4 ミクロスコピック加熱
 - 5.5 集束化の原理
 - 5.6 温度の役割
 - 5.7 安全性
 - 5.8 積算量 (ドーズ)
 - 5.9 臨床事例
- 第6章 自然療法としてのオンコサーミア
- 6.1 ホメオスタシスの復位
 - 6.2 細胞の自然死の促進
 - 6.3 細胞転移の阻止
 - 6.4 転移がん細胞に作用

現代における茶道文化の浸透

ブダペストの茶人たち

2014年の秋、ブダペスト訪問旅行中に、私どもの古儀茶道藪内流新宿研究会は、国立民族博物館大ホールにおいて、点前を披露し、集まった人々を和菓子と抹茶でもてなしました。現地では裏千家茶道を学んでおられる十数名のサポートを得て、盛大なお茶会を催すことができました。ハンガリー人の茶人たちは、しっかり日本茶道のマナーと、日本文化のセンスを十分に身に付けておられたのには、本当に驚かされました。

近代日本茶道

ハンガリー人は、言葉に表せないことでも理解できる共通点を、日本人の中に見出すかもしれません。それは、もともと、ルーツがアジア系民

族で、よく似た昔話があり、言語の並びに共通点がある等々の様々な共通点に関係しているように思います。

近代、ハンガリーと日本は国交を開いてから145年以上になりました。お互いの国には、日本ハンガリー友好協会、ハンガリー日本友好協会があり、日頃から活発な活動を展開していて嬉しいことです。このように、ハンガリー人と日本人は、共通の土壌をあちこちにもっておりますから、日本文化の代表にあげられる茶道に興味をもち、茶道への理解を通して、もっと日本を知りたくなるハンガリー人は、きっといるだろうと思います。

ここでは、いろいろな趣味がある中で、自国の文化の茶道に心が惹かれる日本人が、どんな背景で茶道をとらえ、継承して今に至っているかを追ってみたいと思います。そうすれば、今後、ハンガリーを含め、外国の方々においても、はじめは好奇心から始めた茶道が、本格的な理解に至

るにつれ、その後、どのように継承発展させていくのか、将来像が見えてきそうに思いうのです。

侘び茶の大成

“茶”は12世紀鎌倉時代に、南宋(中国)より、禅宗の僧・栄西禅師が、抹茶にして飲



む飲み方と共に茶の種を我が国に持ち帰り、条件の合った土地に茶の木を植えて、そこから国内に広まったものです。最初は、薬として伝わりました。以来、禅寺と茶道は近い関係を保ち、現在に至っています。

時代が進み、武士中心の世の中へと変わっていく中、織田信長、豊臣秀吉らのサポートを得て、特に16世紀、当時の茶人で商人であった千利休を中心に、珠光により芽生え、武野紹鷗に受け継がれた「侘び茶」を現代のような形に集大成する作業が始まりました。「もてなす」形を、客の前で茶を点てる所作で見せるようになりました。以後、茶道の各流派が、家元制度を確立し、400年をかけて今日まで受け継いでいます。

茶会に使用する道具類には、日本の芸術がすべて含まれているといわれます。茶室や書院などの建築、床の書や絵、茶室の床に掛けられる花、焚かれる香、また茶碗、花入れ、水指などにみられる焼物、棗や盆

瀬川 隆生

に見られる塗物、釜に代表される鋳物、木と木を組み合わせて作る棚、風炉先、棚、茶筌や茶杓にみられる指物、茶菓子として出される主菓子や干菓子全般の和菓子、懐石に代表される日本料理等々で、すべて自然の素材を使うのが原則です。

女性の参加

利休時代から明治維新ごろまでの封建社会において、女性が茶道に参加する機会は非常に限られていました。茶道は、ほぼ男性のみが関わってきたものなのです。明治時代になり、文明開化がはじまると、西欧文化の導入を活発化させる動きが起こり、日本文化に対する相対的な社会的役割が下がっていきました。この風潮に伴って、茶道において

は、男性の弟子の数が減ったと言われています。

一方、女学校において、はじめて正式に作法の授業に茶道が導入されました。家庭でのもてなし役として「茶道は女性にとって作法」として受け入れられたのです。「お茶を稽古した人は、第一に自分の座るべき位置を知っている。・此の心得のない人は、・座敷の入り口に座りこんで、・少しのことにも転ぶような恰好する。・一寸した道具の扱い方、手つきから、茶の心得の有無は判るのである。」とは、茶道授業の導入に踏み切った当時の跡見学園、跡見花溪のことばです。

財界の数寄者

日清・日露戦争での勝利を経てナショナリズムが高まると、自国文化への回帰が進み、茶会の様々の道具を芸術作品とみなした著名な財界の男性の数寄者も茶道を盛り上げるようになりました。

男性茶人の求める精神性と芸術性

大正・昭和時代、男性の茶人の中には、茶道が禅宗と深くかかわっているという精神性と芸術性を併せ持った魅力にひかれて、根強く茶道を続ける層がありました。特に、茶室の軸は茶室の第一に重要な道具で、茶会のテーマを提示するものです。禅語が掲げられることが多いのですが、禅宗における修行僧の課題、公案に対するものに共通すると言われます。

また、茶道では俗世間から遠く離れた山の中の侘びた庵を茶室に見立てています。静かな空間で、ただ一服の茶を亭主と客が、思いやりと感謝をともにして喫するだけ、のことです。そのひとときには、細やかな精一杯の亭主のおもてなしが詰まっています。その心配りは、茶室に至る道である露地と呼ばれる入口から、すでに始まっています。

ここでは、説明を書ききれないので省略しますが、茶道では、茶一服のひとときを一生に一度の掛けがえのない時間として亭主と客が大切に共有して楽しむということです。

いくつもの時代を乗り越えてきた茶道は、精神的な心の友としての役割をもち、日常の身近なものとして日本人の間で受けつがれてきました。

現在女性が茶道を始める動機

旧社会では女性の職場は限られていました。多くの女性が積極的に茶道を習いだしたことから、女学校で茶道教授の免許が与えられるようになったことは深い関係があるようです。この結果、教授者として女性が茶道の分野を占有していくことになったのです。より多くの女性は積極的に稽古に励み、茶道教授者になり、弟子の数は、20世紀半ばには、男性を上回るようになったと言われます。

第二次世界大戦後になると、茶道点前は女性にとって作法という考え方が大流行するようになりました。「訪問先での玄関や応接間での、ふと感じる静かなたずまいと上品なみだしなみ、そして(その方の)優雅な立ち振る舞い。これは決まって家の主婦の、茶の湯の素養の片鱗がのぞいている」と裏千家家元の身内である塩月弥生子さんは述べています。素敵な女性になるために、クラブ活動や個人教授宅での茶道稽古に、現代の多くの女性が向かい、稽古に励むようになりました。近代、特に、結婚前の女性にとって、素養として、代表的な習い事の一つになっている事実があります。

社会の中の茶道

日本は少子高齢社会になっておりますので、趣味を継続する高齢者の人数も増える傾向にあります。日本の文化の良さが再認識される社会が、今後、続いていくと思



われます。茶道の点前を観察すれば分かりますが、その動線は極められたように、まったく無駄な動きがなく、合理的に集約されています。

迎える客に配慮して動作をし、清潔感と安心感を与えることもおもてなしの心です。

また、客側も、亭主のこころくばりに最大限にこたえ、行動することが求められます。今、ここ、にしかない時間を、一期一会の雰囲気作りに誠意をもって、お互いが協力して座を盛り上げること、つまり一座建立の気持ち大事といわれています。

これまでみてきましたように、日本の茶道愛好者の目的は、禅的な精神性に心と襟を正そうとする人々、日頃の煩雑さから抜け出して別世界に身をおいて静けさと一服の茶を楽しむ人々、奥深い日本芸術性を探求し追及する人々、無駄のない合理的動きや品性ある振る舞いを身につけ、それを日常に生かそうとする人々と、多様です。

茶道を続ける人々は、周囲の世界を巻き込みながら、今後の日本社会や家庭で、また世界の茶人たちと和を広げて、ますます輝き続けるであろうと予想し、期待しております。

Visegrad Group 25周年記念コンサート

瀬川 知恵子

2016年2月8日、東京広尾にある駐日チェコ共和国大使館で、未来を担う若手音楽家達による、ヴィシエグラード・グループの25周年記念コンサートが開催された。チェコ、スロヴァキアならびにポーランド共和国とハンガリーは、安全保障の軍事、政治的協力で、ドナウ川の曲がり角、ドナウベント地方のヴィシエグラードに集結し署名をした。ヴィシエグラード4と呼ばれる協定である。1989年の体制転換後、ワルシャワ条約機構やコメコンの改革、解体を目指した動きが広がった。ヴィシエグラード4(略してV4)は、これに連動して協力関係を築こうとしたもので、その後、小泉首相がV4と対話をして協力推進を進め、麻生首相はV4との協力を強化、安倍首相になって初の「V4+Japan」の首脳会合がワルシャワで行われた。昨年12月には、日本で初めての「V4+Japan」会談が開催されるまでになっている。特に原子力、再生可能エネルギー

中に、また、三度目のハンガリー訪問時に立ち寄った観光地だ。見晴らしの良い高台から、なんともゆったりとドナウ川が方向転換する様子、川の周辺に広がる大地を一望できる場所がある。

V4の議長団は毎年6月に交替する。昨年から今年5月までの議長国はチェコ共和国。コンサートの始まりは、ドマーシュ・ドゥップ駐日チェコ大使のご挨拶だった。初めに日本語で話されたので、会場は、おおよとどよめいたが、ここからは英語にしますと、ユーモアたっぷりのにこやかな大使だった。

1993年1月1日、チェコとスロヴァキアは連邦制解消(分離独立)に合意。1992年12月31日、当時、ブダペストに滞在中の私たち家族は、スロヴァキアの首都ブラチスラヴァを通過してプラハに旅行に出かけた。帽子を被らないと、頭痛がする厳しい寒さを、初めて体験した旅だった。大晦日、そし

のである。

そんなことを思い出していると、コンサートは、「4か国を旅する」と題して、まずチェコ共和国からスタート。ピアニストで作曲家のイジー・トゥルチーク氏が不協和音を見事に組み入れた自作のピアノ曲を、ソプラノの高橋ゆかりさんがドヴォルジャークの歌曲を披露。ヴァルタヴァ川(ドイツ語名ではモルダウ川)のように、ゆったりと流れる落ち着いた曲が多かった。

次の音楽訪問国はハンガリー。わくわく感を押さえられず待っていると、大きな体を揺らして、クラリネットのコハーン・イシュトヴァーン氏が登場。ピアノは、ほっそりした高橋ドレミさんである。彼女の名前は芸名なのか、本名なのか聞き忘れたが、実の名前だとすると、音楽への両親の期待、思い入れが感じさせられる。

さて一気に始まったコハーン氏の超早いテンポのクラリネットに聴衆は唖然。これまで聞いたことがない、スピードと圧倒する技で、一瞬のうちに聴衆を虜にしてしまった。なんと楽しそうに、なんと自信ありげに、なんとという余裕で吹きまくることか。私は、すっかり嬉しくなって、首を左右に動かして一緒にハンガリー舞曲やロマニアンフォークダンスの慣れ親しんだ曲に楽しくリズムをとって聴いていた。

これまでクラリネットの演奏は、何度も聞いたはずであるのに、彼のクラリネットは、もはやクラリネットの域を超えている音色だった。

とても難しい楽器と聞いたことがある。このようにゆとりたっぷりに、楽しみに演奏できるようになるまで、一体どれだけの練習を重ねたことだろう。私は、魔法のように縦横に走る彼の指を眺めながら、そんな感慨にも浸っていた。

ハンガリー滞在中に仲良くしてくださっ

たハンガリーの友人達が走馬灯のように目に浮かぶ。また帰国後、日本ハンガリー友好協会と一緒に過ごしてきたハンガリー人達の優秀さ、人の良さが、そして可愛らしさが、彼の演奏の中に代表されているように思った。一度、目的に向かえば真摯な努力を惜しまず、それが長続きするかは不安だが、研究心旺盛で情け深く、素朴で一途。少し硬い表情に見えるが、結構ユーモラスで楽しいことが大好きな人々。ハンガリーの曲の中にも、こんな共通点を感じるの私だけだろうか。時には心の底をえぐられるような物悲しい切ないメロディーに、艶歌にも通じる、なんともいえない共感が湧く。日本人の性格によく合って、いつしか心を惹きつけられてしまう曲がある。

クラリネットの音色は、ピアノの演奏と共鳴

して心地よくホールに響き渡った。可笑しかったのは、司会者が、これで演奏は終わりと告げようとしたところ、もう一曲あります、とコハーン氏が主張。司会者を慌てさせ、「ごめんなさい」と日本語で断ってから、めっちゃくちゃ速いピッチのアレンジ曲を展開し、聴衆を歓喜させた。演奏意欲十分、サービス精神満点である。

休憩を挟んで、後半はポーランドのマレック・プラハ氏が、さすがのショパン中心ピアノ名曲集を繰り広げ、トマシュ・ストロイニ氏のバリトンがホールに染み渡るアリアを歌いあげた。最後にスロヴァキアから、これまた凄い、目の回るように楽しいヘンリ・タタール氏と木下順子夫妻の気の合ったヴァイオリンとピアノ演奏が続いた。本当に中央ヨーロッパは音楽と芸術の宝庫だと思った。

私はどうしても、ハンガリーに最良目になるのか、ハンガリー演奏チームが今夜は最高と秘かに思った。4か国の演奏旅行が

終わると、コンサートの仕上げは、ピルサーの国らしく、チェコビールとワイン、おつまみのカクテルパーティーでお開きになった。

私がハンガリーに住んだ日は、もう、20年も前、二昔前の話になった。ハンガリー事情に詳しい盛田常夫先生のご紹介で、



コンサートに漲っていた若い情熱で、4か国が力を合わせて、なんとか良い知恵を出して助け合って、この困難を乗り越えて欲しいものと思う。

中央ヨーロッパの国々は、これまで何度も苦しい中を生き抜いてきた歴史と知恵がある。周囲を他国に囲まれた地形から、



一分野の協力の深化を安倍首相は共同声明で発表した。世界的音楽家が集中する中央ヨーロッパの国々とのパイプ役に、女優でピアニストの松下奈緒さんが親善大使に任命されたことは興味深い。

ヴィシエグラードは、私もブダペスト滞在中

て元日と、街は何の変化もない。歴史的な瞬間を見ようと思ってきたのに、プラハの街は、平和な静けさ。単に日が変っただけの歴史的移行風景だった。こんな国の分離独立の仕方があるのか、と両国の穏やかな心の受けとめ方、寛容さに感心したも

エッセイ

ハンガリー語を初めて習ったフランチェスカさんも、カタリンさんも、すでに他界したと聞く。一緒に生け花を習い、お互いの会話を教えあった元気印のマグダさんは、最近酷い難聴で、友人でも連絡がとれないという。かくいう私も、古希にもうすぐ手が届く年齢になった。月日が過ぎゆくのは、なんとも淋しいことである。楽しく老後を過ごすのは重い課題だ。時代は確実に進み、事情も変わったのである。

今、ハンガリー国内は難民問題で大変なことになっていると連日、ニュースに取り上げられている。自国の経済を維持することさえ大変なのに、大量の難民が流入するハンガリーは、どんなに苦しい立場に追い込まれていることだろう。心ないバッシングも多いと聞く。これから、ハンガリーは、どこに向いて進んでいくのかと考えると、本当に心が痛む。この問題はハンガリーに限らず、いずれは日本も抱えることになるのかもしれない。

エッセイ

彼らにはいつも緊張感があるという。ハンガリーは、これまで戦争に勝った歴史がないという国だ。国歌も暗い内容の歌詞ばかりが並んで気の毒になるくらいだ。

それでも、ハンガリーは、千年以上も、きちんと歴史を繋いで、世界的にも有名な競技や選手を輩出する国だ。数学、物理の面では、世界的にも最高水準をいくのではないかと思う。優秀な頭脳と先を見通す賢さと内面の強さがなければ、この国は、ここまで来なかったはずだ。

今夜の熱気溢れる素晴らしい演奏に浸りながら、これからの中央ヨーロッパの若者達の協力で結末に注目したいと思った。4つの国が一致協力して、なんとか難題を押しつけてほしい。

大好きな国、ハンガリーに幸多かれと祈るばかりである。

(せがわ・ちえこ 東京在住)

文芸評論

恋はわりなき、はかなきもの

― 岸恵子の恋物語を読む

盛田 常夫

映画好きの母に連れられ、小学校就学前から良く映画館に通った。1950年代前半のことだ。その頃に見た映画の一つが、氏家真知子を演じる岸恵子主演の「君の名は」。佐田啓治が扮する後宮春樹と、何度もすれ違う綺麗な女優さんがいたシーンだけは、今でもはっきり覚えている。数えてみれば、岸恵子が21～22歳の頃、もっとも美しく輝いていた時のことだ。映画制作に先立つNHKラジオドラマの放送時間になると、皆、ラジオの前に集まったことも、淡い記憶とし残っている。銭湯でも、脱衣所のお客が聞けるように、ヴォリュームを上げてラジオ番組を流していた。

学校に通い出してからは映画を見ることもなくなり、やがてテレビの普及に伴い映画館が次々と閉鎖され、映画界が斜陽産業になっていった。そういう時代に育ったからか、邦画と洋画とを問わず、映画や俳優への興味はほとんどない。

近年、往年の女優岸恵子がかもつばら文筆で活躍していることや、彼女の恋物語が小説になったことは知っていたが、まったく関心がなかった。15も年齢が離れていると、世代が違う。戦前生まれと戦後生まれでは、戦時体験の有無という決定的な断絶が存在する。

ところが、最近、岸が1人舞台で自らの恋物語を演じているドキュメンタリー番組を見る機会があった。岸のお相手が、私と2歳しか離れていない男性と知って少々気になった。年齢差よりも、自らの恋愛体験を小説に出来るというたくましさに驚いた。もっとも、岸はもう女優というより、文筆家だと考えれば納得がいく。自分の恋愛体験を私小説にするのだから、大正や昭和の作家たちが自らの壮絶な恋愛を小説にしたのと同じだ。晩年の恋に賭けるというような無我夢中さではなく、華麗なストーリーの主演として、岸は自らの恋を演じたのではないか。そして、それが化粧を施された恋物語になり、相手の男性は恋物語のオブジェに昇華した。

笙子と名付けられた岸の分身と、九鬼兼太と名付けられた男性との出会いから始まる恋物語の一部始終が、『わりなき恋』（幻冬舎、2013年）と題された小説になった。「わりなき」とは「理無い」、つまり「理屈では説明つかない」、「理屈を超えた」という意味と、「道理に合わない」という意味を併せもつ。歳を取っても、恋心は理屈では説明尽くせないものという純真さを言い表していると同時に、妻子ある男性に恋するという不条理を暗示している。岸が70歳、お相手が58歳の恋物語である。往年の大女優と大会社の重役というセレブな恋は、ふつうの人から見れば現実離れしているが、岸の晩年の恋を彩るのに不足はない。さまざまなフィクションが加えられているとはいえ、ストーリーのほとんどが実話にもとづくものだという。

人は生きていることを意識している限り、異性への想いや憧れ

を失うことはない。それが失われれば、人生も終わりである。男と女との関係は歳により相手により実にさまざまで、齢を重ねれば、自ずと互いに求めるものや恋の形が変化していくが、恋すること自体に年齢制限のような野暮な決まりはない。

とはいえ、60歳や70歳にもなれば、それぞれの恋愛経験や社会経験に囚われるだけでなく、さまざまな人間関係の縛りの中で生きているはずだから、単純に恋情だけにのめり込むことはできない。体力も青年時代のそれと比べようもないほどに落ちているから、精神的な満足により大きな価値を求めるはずだ。意識しようとしまいと、晩年の恋にはそれなりの大人の分別が働く。

岸は離婚して以降は、ほとんどの時間を1人で自由に過ごしてきた。だから、新しい恋が芽生えたとしても、社会的縛りに囚われることはないし、相手を独り占めにしようという意識もない。他方、相手の男性は家庭を顧みる暇もなかった大企業の重役とはいえ、5人の子供から形作られた大家族の絆に縛られている。子供はそれなりの年齢に達しているから、親がいなければ子育てに問題が生じるわけではない。だから、晩年の恋に「不倫」という否定的な響きがある形容は似合わない。とはいえ、30年近くも生活をともにしてきた家族との縁を切ることは容易でない。いかに美貌を誇る往年の女優とはいえ、出会って僅かな時間しか経たず、しかも日々の生活を一緒にすることなく、時折の逢瀬を楽しむ仲だ。その短い時間のなかで、これまでの人生を捨てて、12歳年上の相手と残された時間を一緒に過ごすことを決断するのは難しい。

口に出すかどうかは別として、男はそのようなそのような決断を避けながら、時折の逢瀬が続くことを望むだろう。それでも、大企業の重役というポストや、家族の絆や社会的地位をすべて投げ捨てて、岸の許へ赴くことが許されるのか。男はこの問いかけから瞬たりとも逃れることができなかつたはずだ。大女優との恋が成立するのも、大企業の重役という社会的地位があつてのことだ。その地位が失われれば、恋は岸へ従属する日常に変わってしまうのではないか。だから、彼は一度も、岸にたいして一緒になろうとは言わなかつた。最初から、つまり知り合った出発点から、二人の恋情が深まる深度には限度があつた。

男と女では恋へののめり込み方が違う。それは男と女の本能的な違いでもある。女に感性を優先するから、恋情に打算や計算が入り込む余地は、男に比べてきわめて小さい。とくに自由に生きてきた岸にしてみれば、恋のストーリーを楽しむという本能的な職業意識が働いても、それ以上の打算はなかつただろう。逢瀬の時間にだけすべてを注いでくれれば、それでよかつた。

これにたいして、男ははるかに打算的であり、悟性的である。いろいろなしがらみの中で生きている企業経営者であればなおさ

ら、種々の計算が働く。サラリーマン経営者だから、世界を駆け巡り、その合間を縫って逢瀬を重ねるといふ映画のような体験を永遠に続けられるわけではない。役員を退陣すれば、会社の経費で世界を飛び回る仕事は消滅する。フローの所得も激減するから、自由な行動に大きな制限がかかる。資産があつても、5人の子供や妻へ残すことを考えれば、自分が使える余地は限られている。思慮のある男なら、こういう計算が頭を駆け巡る。にもかかわらず、頻繁な長期出張の間に訪れる珠玉のような恋のオアシスを求める欲求には抗しがたかつた。しかし、それはオアシスであっても、家庭ではない。長期出張の後に戻る家庭は、日常の安らぎを与えてくれるところでもある。そこでは恋のオアシスは、蜃気楼のような幻だ。

こう考えると、男はずるい。帰る家庭があつて、旅に出れば、極上の恋の楽園がある。もちろん、日常の世界と非日常の世界を往復できる極楽を楽しむことのできる男など、そうざらにいるものではないが。岸はそのことを分かっていたから、割り切っていた。男に家庭を捨ててと懇願する意味もないと考えていだろう。しかし、自分が知らない別の日常の世界で、男がどのように生きているのか、気にならないはずはなかつただろう。

翻つて、この二人は本当に恋をしていたのだろうか。岸にとって、この恋は半信半疑の恋だつたのではないか。だからこそ、私小説にすることができたのではないか。恋い焦がれて、失意のうちに失つた恋を、人は小説にできるだろうか。

他方、男は生涯を共にする恋人として、岸と寄り添うことを考えていたのだろうか。出張の合間に、パリや蘇州、モスクワやブダペストで逢瀬を重ねる男は、各地で会社の部下に岸を紹介したり、運転手役を任せたりしている。岸がその度、二人の関係を隠し通さない男の不用意さに懸念を伝えている。本当の恋なら、わりなき恋であればなおさら、可能な限り、隠しておかなければならないはずである。しかし、男にそれができなかった。往年の大女優が恋人であるという事実は、隠し通すにはあまりに惜しい「男の勲章」だつたのだろう。推測にすぎないが、自らを誇りたいという不用意さが、男の社会的地位の喪失に繋がつたのではないか。

日本の会社、とくに製造業のような保守的社会にとつて、幹部経営者の「不倫」の噂は企業イメージにかかわる。欧州の会社で許容されることも、日本の会社では許されない。恋人との逢瀬に社用車を使い、もしかして瀟洒なレストランの食事代を社費で済ませることがあつたなら、社内でポスト争いをしている者たちの格好の攻撃材料になる。不用意な言動は致命的だ。男はそこを甘く見て

いなかつたか。いかに信頼がおける部下とはいえ、人の口に戸は立てられない。まして、大女優岸が恋人となれば、虚実を問わず、あらゆる噂はあつという間に社内に広がつただろう。それを覚悟していたのだろうか。男が岸と付き合つて数年後、男が還暦過ぎて間もない歳で副社長を解任されたのは、岸との関係が社内に広まつたからではないか。副社長という重役を退くにはあまりに若すぎる。これは男にとって誤算だつたに違いない。重役解任とともに、世界の都市を縦横に往来する恋物語も終焉を迎えた。

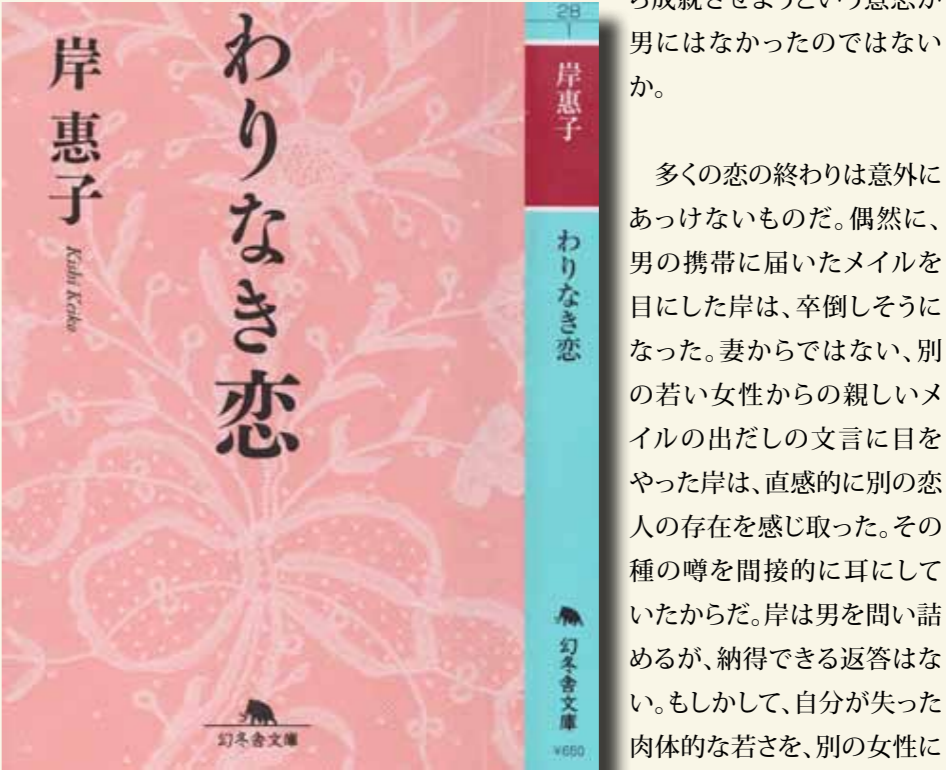
なぜ男はこの恋を隠し通そうと考えなかつたのか。本当にかけがえない恋だと思つていたなら、成就させようと思つた恋だつたなら、その日が来るまで、隠し通したのではないか。だから、最初から成就させようという意思が男にはなかつたのではないか。

多くの恋の終わりは意外にあつけないものだ。偶然に、男の携帯に届いたメールを目にした岸は、卒倒しそうになった。妻からではない、別の若い女性からの親しいメールの出だしの文言に目をやった岸は、直感的に別の恋人の存在を感じ取つた。その種の噂を間接的に耳にしていたからだ。岸は男を問い詰めるが、納得できる返答はない。もしかして、自分が失つた肉体的な若さを、別の女性に求めているのではないか。こ

の恋の始まりから岸がもっとも気にしていたことが赤裸々になった。嫉妬と怒り、屈辱と絶望が、岸の体をかけめぐる。しかし、男は弁解することなく黙り込み、生涯を共にしようと思つた岸を説得することはなかつた。こうして、岸の恋物語が終焉ステージに入る。

長期の海外出張をこなす会社重役が恋のオアシスを求めて、世界の都市で逢瀬を繰り返す様は、セレブな岸の恋物語にぴつたりな筋書きだつた。そして、実際にそれが私小説になった。岸が幻冬舎からこの小説を出版する少し前に、相手の男性は同じ出版社から「トヨタ生産方式」の新書本を出した。岸が自らの恋を「わりなき恋」に昇華させたのなら、無粋なビジネス書ではなく、「はかなき恋」の返歌で応えて欲しいと思うのは無理な注文か。

（もりた・つねお 2016年2月）



日本語の授業をのぞいてみませんか

内川 かずみ

突然ですが、みなさまは、「着る」は「着て」、「来る」は「来て」、「切る」は「切って」、「聞く」は「聞いて」、「きしむ」は「きしんで」、「きらす」は「きらして」になるというこの活用がどういう仕組みなのか、お考えになったことはあるでしょうか。

ら、何かバカにされたように感じるの私だけでは、何かの機会にも応用が利くように外国人の日本語学習者にわかってもらうには、一体どう説明したらいいでしょうか。

知識が必要だということを、身をもって知りました。よく知っているはずの母語なのに様々な疑問や珍回答に遭遇することがおもしろく、あつという間に年月が過ぎ去ってしまったという感じです。

日本語自体の尽きない謎も魅力ですが、



「I am Nancy」は「私はナンシーです」ですが、「どんな動物がお好きですか」、「私は猫です」という会話では、夏目漱石の小説のように猫が突然自己紹介を始めてしまっているのでしょうか。

「まで」と「までに」、似ているので日本語学習者は混同しますが、「死ぬまでバンジージャンプをしてみたいです!」と言われると、「えー、そんな死に方…」と思いませんか。

「あの一」と「えーと」も似ていますが、「25+98は、えー…」と計算している時に横から「あの一…123ですよ」と言われた

自己紹介が遅れました。内川かずみと申します。エトヴェシュ・ローランド大学(通称ELTE(エルテ))日本学科に日本語教師として勤め、今年の9月で10年目に突入します。もともと私は日本語教師になるつもりは全くなく、それどころか、日本語教師という職業の存在自体にもあまり気づいていませんでした。こちらに住み始めた頃、現地の方に「日本人なら日本語が教えられるだろう」とレッスンを頼まれたのがきっかけです。

実際にやってみると、すぐにいくつもの壁にぶつかりました。外国人を相手に「日本語」を教えるのには「国語」とは全く別の

私にとっては職場の大学生たちがそれにも増して魅力的です。日本学科は今、いわゆる「クールジャパン」のおかげで非常に人気があり、選りすぐられた優秀な人たちが入学してきます。優秀な人たちが様々なことに挑戦しながらぐんぐん伸びていく様子を見るのは、さすががしく気持ちの良いものです。

「日本学科を卒業した人たちは、何をやるの?」と聞かれることが多いので、今でも日本に関わってる卒業生たちの中で、特に面白いことをしている人たちを少しご紹介させていただきます。

例えば、外国人なのに日本の語学学校で日本語教師をしていたという稀有な経歴を経て、この4月からは博士号を取得した母校京大に戻って教鞭をとることになっている人。リスト音楽院に自分を売り込んで仕事を作り、現在は日本人デスクのような役をしている人。明星大学で英語を教え、余暇にはハンガリー民族ダンスグループで日本人ダンサーたちとともに踊っている人。京都で古民家を改造して暮らしながら、大学院で日本の伝統建築技術を研究したり、宮大工に交じって仕事したりしている人(清水寺等の修復に関わったそうです)。民俗学者南方熊楠の研究者で、阪大で博士号を取ってそのままそこで民俗学を教えている人。日本でインディーロックの雑誌編集やDJをしていて、自分でもCDを出すのが夢という人。留学先の大学で事務職に就職させてもらった人。書道を極め、師範並みの字を書くようになった人。日本学科卒業後、映画学科の大学院に進み、現在は東大で漫画・アニメ研究の人。同様に映画学科に進学して能楽研究に携わり、ハンガリーで現代風な能の公演を实践した人。日本学科と哲学科、二つの博士課程に並行して通い、丸山真男研究にいそむ傍ら、ハンガリーでアジアについて学んでいる人たちのための3日間にわたる研究発表会を毎年主催している人(この3月に第7回目が終了しました)。オランダにある日本人向けバーで働いている人。ANAに就職し、ベルギーの空港で働いている人。日本人にヨガを教えながら、お茶大で大正時代の児童雑誌『赤い鳥』の研究をしている人。

ほかに今、日本あるいはハンガリーの大学院で勉強している人については枚挙に暇がないのですが、研究テーマをざっと並べると、日本の部活動だったり、落語における関西弁だったり、日本人の集団意識の民俗学的・社会的分析だったり、国語国字問題だったり、黄表紙だったり、演劇学だったり、川端康成だったり、伊タコだったり、俳句だったり、ユタだったり、日本におけるハンガリー語教育だったり、二葉亭四迷だったり、春画だったり、僧兵だったり。本当

にいろいろです。そしてもちろん、こちらの企業さんで通訳・翻訳業や日本人のお客さん相手のお仕事をさせていただいている人たちや、国際交流基金ブダペスト日本文化センター、在日本ハンガリー大使館、在ハンガリー日本大使館などで働かせていただいている人たちもいます。

ちなみに、本誌『ドナウの四季』にはほとんど毎号、自分のまわりのハンガリー人が書いた文章を載せていただいているのですが、今回の『ドナウの四季』にも2人の卒業生に原稿をお願いしたので、ぜひご一読ください。今までの執筆者たちはみんな、自分が書いた日本語の文章が活字になって、大変喜んでおります。載せてくださっている編集者の方々と、読んでくださっている皆様に、厚く御礼申し上げます。

…と、こんなふうに、卒業後は十人十色の展開を見せている学生たちですが、千里の道も一歩から。今回記事を書いてくれたカタさんとリッラさんについても、私にはひらがなを教えたときの記憶がまだ残っています。実は本題はここからで、現在、一生懸命がんばっている学生たちのサポートをしてくださる日本人ゲストを募集しています。

<1年生の授業>

毎週金曜日 9時半～10時半、11時半～12時半、14時～15時

・3つとも授業内容は同じで、来る学生たちが違います。

・いくつかの授業にご参加くださっても結構です。一つでも、三つでも。

・3月25日(金)は学校の都合で休みにになります。

・ゲストに来ていただくのは今学期は4月29日(金)が最終です。

・日本語を習い始めて1年未満の学生たちと一緒に、おしゃべりをしたり、グループで問題に取り組んだりしていただきます。学生たちはみんな多少緊張しながらも、嬉しそうにしゃべっています。

<3年生の授業>

毎週月曜日 14時半～16時

エッセイ

・3月14日(月)と3月28日(月)は学校の都合で休みにになります。

・ゲストに来ていただくのは今学期は4月25日(月)が最終です。

・その日によって授業内容が違い、いろいろな活動をしていただいています。例えば現在は、国際交流基金ブダペスト日本文化センターさんがブダペストのあるギャラリーと共同で行う予定のイベントに協力させていただき、日本の民話のハンガリー語訳と紙芝居づくりを行っています。来てくださるゲストの方々のおかげで、学生たちは本当に楽しそうです。

上記のどの授業も、ELTE人文学部(地下鉄2号線アストリア駅のすぐ近くにあるキャンパス)B棟の242号室で行っています。B棟の中には、教室までご案内する貼紙が貼ってあります。事前のご連絡などは必要ありません。気分が乗った時にふらっと来ていただけたら嬉しいです。場所がわかるかどうかなど、何かご心配でしたら、お気軽にメールをください(これらの情報は2016年4月までのものです。来年度はまた予定が変わる可能性があります)。

ハンガリーでは、いくらがんばって日本語を勉強しても、実際に日本人とコミュニケーションをとる機会は少ないです。日本人の方がたくさん来てくださると、学生たちの目はとても生き生きします。

また、ハンガリー人学生のためにご自分のお時間を使って授業に来てくださる方々にはこちらとしてはもちろん感謝の念しかないわけですが、授業が終わってからは「意外に自分自身にとって勉強になった!おもしろかった」と言ってくださる方が多いということも、厚かましいことは承知の上で書き添えさせていただきます。冒頭の質問にも戻りますが、私たちは母語のことを知っているようで意外に知らないものです。それが面白くて10年も関わってきてしまった人間がここにいるので、本当です。

(うちかわ・かずみ、

kazumi812@gmail.com)

読むことは旅をすること — 文学の力

Dalmi Katalin

子供のときから小説が大好きだった私が、大学院の日本学科に入学したとき、文学を専攻として選ぶのは当然のことでした。小さい頃から心を癒してくれたのは、やはり本でした。「本の虫」と言われるほどではなかったのですが、今いる現実とは全く違う世界に入り込んで、全く違う人物と一緒にあって、共に笑ったり泣いたりするのは、最高に楽しい時間でした。6歳のときに初めて読んだ本のタイトルと内容は、今もはっきりと覚えています。ハンガリーの有名な児童文学作家の一人であるバーリント・アーグネシュ(1922～2008)が20歳の時に書いたネコとハリネズミの話「Gücülke és cimborái(グツルケとその仲間たち)」でした。これは私にとって初めての読書体験でした。

大学に入るまで、ハンガリーの小説の他、ロシアやフランス、そしてイギリスやアメリカの様々な作家の作品をたくさん読みましたが、日本の文学と出会う機会はありませんでした。当時のデブレツェンの図書館や本屋さんには、日本の小説が置いていなかったように記憶しています。初めて日本の小説を手にしたのは、ブダペストに引越し、大学に通い始めたときでした。それは川端康成の『古都』(1962)のハンガリー語訳でした。ずっと楽しみにしていた「日本の小説」だったので、正直に言うと、楽しく読むことが出来ませんでした。むしろ、少しがっかりしたと言った方がその時の気持ちに近いです。ノーベル賞を受賞した作家の作品についてこんなめちゃくちゃなことを書くのはどういうことなの?と思われるかもしれませんが、やはり楽しく読んだとはどうしても言えません。それは、なぜだったのでしょうか。

その理由は翻訳にありました。ドイツ語からの間接訳であることもありますが、ハンガリー人の耳にはどうしても不自然に聞こえるハンガリー語で書かれている物語を楽しく読むことは、当然できないわけです。日本語を話せるようになってから、このハンガリー語のテキストが日本語の構造と論理を反映していることが分かりましたが、それでも自然に物語の世界に入り込むことは出来ませんでした。ちょっと残念な話です。しかし、1960年代の京都を舞台にした、生き別れになった双子の姉妹の数奇な運命を描いたこの『古都』が、実はとても魅力的な作品であることには、初めて読んだときにも気がつきました。それまで読んだ作品とは別の魅力が『古都』にはありました。ドキドキ感を与えてくれるアクションというよりは、消えかけている世界の有様を一枚の写真のようにそっと写

し出すノスタルジーに似た感情が、作品全体に漂っています。欧米の文学を読んで育った私にとっては、まるで新しい体験でした。これは私が日本の文学に対して興味を持つようになったきっかけであり、また、現在取り組んでいる博士論文のテーマにもつながる読書体験でした。

私は現在、川端康成とはやや遠いと思われる村上春樹の文学について博士論文を書いています。彼の作品もまた「ノスタルジー」が伝わってくる点では、川端の小説と一致しています。生き霊や幽霊などを登場させ、『雨月物語』や『源氏物語』の世界を想起させる『海辺のカフカ』や、高度成長期の神話とも読める『1 Q 8 4』などの村上の小説は、現在の日本の文化的多様性、東洋と西洋の融合を最もリアルに表現しているものではないかと思えます。

小説、そして文学そのものはある種の快楽を与えてくれる、ただの遊びのようなものに見えるかもしれませんが、ある特定の民族や国、そしてその文化や考え方を理解するためのキーとして重要な役割を果たしています。文学は書くことも読むことも、けっして、個人的なものではありません。それぞれの作品の背景には、作者の個人的な歴史とともに、その作者が生まれ育った環境、つまり大文字の「歴史」が存在しています。

皆さんも良くご存知と思いますが、去年の夏に日本の文部科学省が打ち出した「文学部や社会学部など人文社会系の学部と大学院について、社会に必要とされる人材を育てられなければ廃止を検討せよ」という政策は、大きな問題になりました。確かに、私たち文学研究者がやっていることは、例えばエンジニアや医者などといった、「社会に必要とされる人材」とはかなり異質であることに違いありません。しかし、それは必ずしも無駄なことであるわけではないのです。優れた文学作品は、読者を別の世界に引き込む力を持っていると同時に、私たちの視野を広げてくれる機能を有しているのではないかと、私は思います。

私にとって日本の小説を読むことは、遊びである一方、日本に暮らしていても時々遠くに感じられるこの国を理解するための有意義な道具の一つもなっています。そして、これはロマンチズムかもしれませんが、このように文学研究(あるいは翻訳作業)を通して、知らない世界を身近に感じさせ、他人に対する理解力を深めることが出来るのであれば、私たちのやっている仕事も決して無意味ではないでしょう。

皆さんも機会があれば、是非ハンガリー、そして世界のいろいろな小説を読んでみてください。日本の詩人・児童文学作家、長田弘氏(1939～2015)が言ったように、「読むことは旅をすること」でもあるのですから。

(ダルミ・カタリン 京都大学)



私は日本で天職を見つけたかも

Jakab Lilla

「しんどっ!」と思ったのは2011年冬のある月曜日、朝4時。日本へ2回目に留学してきて、6か月たった頃だった。寒くて、暗くて、コンビニしか開いていなかった。始発の地下鉄に間に合ないとアルバイトに遅刻してしまう。週5回、大学の講義の前は、いつもこのような感じだった。そして午前11時頃から京都大学に向かい、講義を受ける。さすが京大!素晴らしい教授陣がそろっている。勉強の後はママチャリに乗り、午後7時から京都で最も有名なタクシー会社の運転手さんたちに英語を教えに行く。「おつかれ!おつかれ!」皆さんフレンドリーで、働き者。仕事でたくさんストレスが溜まっているはずなのに、例外なく笑顔満点。

こんな生活をしていた私は、その後2013年9月、つまり大学院を卒業してから1年後、正式にこのタクシー会社の職員になった。ちなみに、私は運転免許証を持っていない。

所属は「外商部」という部署である。この部署は貸切予約(送迎、観光など)を管理している。入社した時にすぐ気づいたのは、会社の英語版のホームページがないので、会社の提供する幅広いサ



ービス情報が外国人のお客様まで届かないということだった。皆様もご存知のように、京都は世界で最も人気の高い観光地で、外国人観光客にあふれている。タクシー業界でも、英語の使用機会が増えた。そこで英語版のホームページを立ち上げることにした。ホームページを作ったことがなかったため、ウェブデザイン方法を

独学で勉強し、4ヶ月後に英語ホームページを作り上げた。また、外国人のお客様用予約窓口を作り、注文の受け取り、商用英語文章の返信方法を決めた。そのほか、外国人のお客様の対応をマニュアル化した。言葉使いを丁寧にすることが会社のポリシーであるため、英語での接客も、同じポリシーに従うことが大切である。

時間が経つと共に、外国人のお客様の予約数が増加し、英語で観光案内できるドライバーが段々足りなくなってきた。したがって、新たに、もっと責任重大な仕事に取り組む必要がでてきた。それは、英語力の高い人材を育成できるシステムを作ることだった。

このタクシー会社では、運転手さんの英語力に応じて、4つのレベルのレッスンを開講した。生徒さんは20代～50代の通常タクシー運転手と観光案内担当の看板運転手である。仕事相手によって外国人のお客様との会話内容が違うため、教材資料も異なる。すべて手作り。社内英語教育システム責任者の私は中級と上級レベルクラスの講師を担当し、信頼のおける素晴らしいパートタイム英語先生チームには初級とプレ中級レベルのために私が用意したハンドアウトを使ってレッスンを行っていた。

日本のタクシー業界初の本格的な社内英語教育システムを作り上げたので、雑誌や新聞にも取り上げられるようになり、注目が集まってきた。きっと他社も同様のシステムを導入し始めるだろう。私自身も、日本で働いている外国人に関するテレビ番組等の取材を受け、少し有名人になったような気分になってきた。

私は本当に教えることが大好きだ。そのきっかけは16歳の時に

英語の家庭教師になったこと。私は新たな練習方法を考え出し、レッスンを盛り上げることが好きである。例えば、座禅について英語で説明する時は、必ず生徒の皆さんと一緒に正座しながらレッスンを進めていく。90分間のレッスンでは、必ず「明日から使える」知識を身に付けてもらうのがポイント。社内英語教育システムを発

足させてから3年目を迎え、生徒さんの人数が最初の2倍に増え、多くのドライバーさんは英語力を自分の収入とつなげることが出来た。社内英語教育システムに参加中の乗務員は現在約210名、会社の総乗務員数の約1割。これで満足すべきではないと思う。このシステムやレッスンをもっと効果的にしたいし、生徒数をどんどん伸ばしていきたい。

いよいよ3月から新しい学期がスタートする。桜シーズンの美しさを英語で如何に表現すれば外国人のお客様に喜んでもらえるかを、各レベルのレッスンに取り入れていきたいと考えている。日本の一番美しい時期が近づくとともに、仕事内容も増えていく。英語レッスン以外の仕事もやらなくてはならない。英語版会社ホームページの情報更新や、英語パンフレットの作成など、様々な仕事が残っている。むしろ、一番気をつけたいのは、頑張りすぎないことである。

完璧主義の私は新入社員の時、本当に苦労した。家についたら夜10時過ぎという日々が続く、プライベートの時間を楽しむことが殆どできなかった。同僚の皆さんの残業している姿を見ると、時間通りに帰る気がなくなってしまふ。働くために生きているのか、それとも生きるために働いているのか。どちらが正解？悩んでいるうちに、悔しくなって、会社を辞めてハンガリーに帰ろうと考えたこともあった。しかし、もうこれ程好きな仕事を二度と見つけられないかもしれないと考え、「自分らしく働いてみよう」と決心した。毎日自分なりの仕事計画を立て、勤務時間内に手の届く範囲の目標を決めることによって、効率よく仕事に取り組むようにした。こうして、ようやく残業主義から解放された。一日ごとに仕事計画を完成する達成感を得ることで、心の整理も付くのだろう。こうして落ち着いてプライベートの時間を過ごし、それによって次の日もまた精一杯頑張れると感ぜられることが、「幸せ」の一つであり、「天職」をちゃんと全うする方法ではないかと思う。

私はこの大好きな会社で大好きな仕事を続けたい。そのためにも、日本の勤務スタイル(残業主義)にも絶対負けない!

(ヤカブ・リツラ)

大切な思い出

Závodni Vivien

人には大切な思い出は一つはありますよね。その思い出は一瞬の出来事かもしれないし、1年間という長い時間で起きたことかもしれない。私の大切な思い出は日本に留学した時のことです。

小さい頃からアニメが好きで、でもそれは日本のものだと知ったのは13歳の時でした。日本の文化や音楽、日本語の響きや漢字に魅了され、日本語科がある高校に入学し、いつか日本に行けたらいいなと夢を見ていました。

その夢が叶いそうになったのは2011年、高校2年生の時でした。日本に留学することが決定し、福岡県に住んでいるホストファミリーと連絡をとり、出発予定日の3月14日をワクワクしながら待っていました。ただ、飛行機に乗るはずだった日に、私は学校にいました。

2011年のもっとも大きな惨事といえば、なんといっても「東日本大震災」・「津波」・「福島原発事故」です。そんな大惨事の中、私が日本に留学することもできるかどうか分からなくなりました。むしろこんな大きな被害で、日本人がすごく大変な時期なのに、日本に行くことを望んでいいのか混乱し始めました。そんな時、ホストファミリーから手紙が届きました。住んでいる場所には影響がなく、私が来るのを待っていると書いてありました。その手紙を何度も何度も読んで、諦めてはいけないなと思いました。一方、止めた方がいいと説得する人もいました。複雑な気持ちのまま、新たな出発日が決まり、嬉しい反面、本当に行っていないのか、迷惑にならないのか、いろいろな不安をかかえて、4月28日に無事に出発することができました。16歳で初めて一人で飛行機に乗って、初めて一人で外国に足を踏み入れました。怖くはなかったが、こんな歳で、これから日本で過ごす8ヶ月間はどうかドキドキしながら、日本へ到着しました。

福岡空港で初めてホストファミリーと会った時、日本語も上手に話せないのに、なぜか何年も前から知っている人たちに会ったような、不思議な感覚に捉われたのを覚えています。兄1人しかいない私は初めて、お姉さんが1人と妹が2人できたことに嬉しい気持ちでいっぱいでした。お母さん、お父さん、3人姉妹と私。一緒に過ごした日々は私の大切な思い出になりました。いろいろなことを教えてくれたり、素敵なおところに連れて行ってくれたり、お母さんが毎日おいしいご飯を作ってくれたり、つらい事も楽しい事も一緒に経験したり、本当に家族の一員にしてくれたみんなにどんなに感謝しても足りないといつも思っています。

日本にいる間はみんなと同じように制服を着て、同じ鞆を持って、学校に通いました。2階にある教室で私の席は窓側の一番後ろの席でした。クラスみんなは優しい人ばかりで、瞬間に友達もたくさんできました。学校に通い始めて間もなく、「自立と協働を学

ぶ体験活動」という行事が阿蘇で行われ、クラスのみならず集団行動を習ったり、阿蘇山に登ったり、山中で出会った牛たちに怯えながらみんなと一緒に騒いだりして、忘れられない数日になりました。

阿蘇から帰って、毎年6月に行われる体育祭のために準備が始まりました。私は体育祭とはどんなものか全く知らなかったけど、全校生徒が赤・青・黄色と3つのブロックに分かれて対抗する行事と友達に教えてもらいました。体育祭でもっとも注目される競技は各ブロックの「パネル応援合戦」です。きれいに見せるために、2週間毎日練習しました。猛暑の中でも、雨の中でも練習は続けら



れ、先輩たちが私たちに笑わせてくれたり、励ましてくれたりしたおかげで毎日が楽しすぎました。

最初、私たち1年生は大きな声を出すことも恥ずかしくて、パネルを上げるタイミングも何度も間違えたけど、練習を重ねるごとにどんどん上手になって、体育祭で優勝することもできました。あの感動を味わうことができると嬉しかったです。こんな素敵な行事ハンガリーにもあったらいいなと思いました。学校のグラウンドに設置されたスタンドは翌週に解体されるのを教室の窓から見て、寂しい気持ちになりました。体育祭前の2週間は学校内どこ行ってもみんなの声が聞こえたのに、終わったあとは何もなかったかのようにすごく静かになった学校は不思議でした。

それから、留学生交流会や文化祭、クラスマッチ、楽しい行事はたくさんありました。部活は3つも入っていました。地学部では夜まで学校に残り、星空を双眼鏡で見たり、冬は星の村という所に合宿に行ったりして、地学の知識を深めることができました。書道部にも入って居ました。もともと字を書くことが好きだったので、ほめられた時とても嬉しかったです。大会にも出ました。毎日教室で遅くまで練習して、暗くなってから帰るという忙しい日々が何週間か続いていましたが、好きなことをやっているとおつという間に時間が過ぎてしまいます。外国人が書道大会に出ることはないの、貴重

な経験になりました。もう1つ入っていた部活はホームメイキング部で、毎週金曜日にいろいろなお菓子を作っていました。文化祭では自分たちが作ったお菓子を売って、集まったお金を東日本大震災で被災された方々に寄付することができました。

日本での8ヶ月間の毎日は忙しく過ごしました。日本人の気遣いや繊細さ、ルールをきちんと守るまじめさ、さまざまなことを体験できてよかったと思っています。貴重な経験をさせてくれた皆さん、優しくしてくれた同級生や友達、家族の一員にしてくれたホストファミリーに感謝しています。子供だった私は日本に留学ができたことで少し大人になれた気がします。

(ズヴォドニ・ヴィヴィエン)

留学生自己紹介

夢を追いかけて

リスト音楽院大学院2年 指揮科

原口 祥司

ドナウ川の流れる街、ブダペストで、私は音楽の勉強を続けている。

ハンガリーとの出会いはかれこれ20年前。高校時代に所属していた吹奏楽部で、ハンガリーへ演奏旅行に訪れたことが契機だった。デブレツェン、ケケケメート、そしてブダペスト。ハンガリー人のおおらかな人柄に惹かれると同時に、いつかここで音楽を勉強したいと夢を描く自分がいた。

高校卒業時、幼馴染みで高校も一緒に楽器を演奏していた仲間が、白血病で世界してしまう。その白血病と闘っていた彼女から生前、1通の手紙をもらった。「私には夢があるの。何年かかってもいいから大学に進学する。そして学校の先生になるの」。私は彼女の遺志を継ぎ、教育学部へ進学し、10年間教員生活を送った。元気で元々かな高校生との生活は、とても魅力的かつスリリングだった。

私が中学生の頃に、脳梗塞を患い闘病していた父が他界した。

父の死が私の夢を思い起こさせ、そして、時を同じくして運命的な出会いが起こる。父の葬儀から1週間ほど経った頃、恩師となる指揮者の下野竜也先生の演奏会へふらりと行き、自分の中の価値観をぐらりと揺るがすほどの感動を覚え、気づいてみると、演奏会終了後に全く面識がないのにも関わらず、先生の控室のドアをノックしている自分がいた。そして開口一番「先生の許で音楽を勉強したいです」と。驚きを隠せない下野先生の顔が忘れられない。

一念発起、勤めていた学校に年度末での退職を申し出、借りていた奨学金を全額返済し、アパートを引き払い、グランドピアノを購入し、実家に防音設備を整えた。今まで放任主義だった母もこれには参って、涙ながらに「今ある幸せを大切にさい」と叱られた。30歳を過ぎてからの息子の奇行に母は猛反対だった。

それに反して、私は下野先生が教鞭をとる上野学園へ。2年半みっちり学び、在学中に紀尾井シンフォニエッタ東京の指揮研究員をさせていただく機会にも恵まれ、研究費を利用して、海外で行われている指揮のマスタークラスへ参加。ワイマール、ウィーン、そしてブダペスト!・・・やっとながった、ただいまハンガリー!

その後、欧州留学を志し、第二の人生がスタートする。欧州のいくつかの大学での指揮科のレッスンを見学し、導かれるように、リスト音楽院大学院への進学を決意した。

そして、ここでもう一人の恩師メドヴェツキー (Medveczky Ádám) 先生と出会うことになった。メドヴェツキー先生は70歳を過ぎた今でも、毎週のように演奏会をなさり、週2~3回ある指揮科のレッスンや、オペラ科の授業の伴奏もほぼ休みなく見てくださっている。先生の尋常じゃないほどの忙しさを目の当たりにし、いつ楽譜を読んでいるのか先生に尋ねたところ、「毎日。毎日ね。午前1時まで譜読みをしているよ」と穏やかに



答えてくれた。彼の生活を近くでよく見ていると、バスの5分の移動でも、休憩中でも、生徒のレッスンの待ち時間でも、時間さえあれば楽譜を読んでいる。もしくはピアノを弾いて歌っている。演奏会後の打ち上げなどもメドヴェツキー先生の姿は見当たらず、ぎっと帰って次の演奏会の曲の譜読みをしているのだと思う。先生の音楽に少しでも近づけられるよう、私も努力し続けたい。

私はバルトークの音楽作品や、彼の生き方に大変魅力を感じ、2016年1月に、彼がブダペスト市内・近郊に住んでいた家々を音楽院の友人達と訪れた。

バルトーク博物館となっているブダ側子

ャラーン通りにある彼の家は有名だが、調べたところそれ以外にも13箇所ほど存在した。彼がリスト音楽院時代に下宿していたであろうアパートから始まり、教授時代、結婚、再婚、そしてアメリカに亡命するまでの家を、時代を追って、当時作曲された作品を確認しつつ、2日間かけて見て回った。

ベートーヴェンがウィーン郊外のハイリゲンシュタットを好み、引越しを繰り返したが、バルトークもまた引越しを繰り返した。例えば、リスト音楽院のピアノ科の教授に就任し、結婚して1人目の子供も生まれた頃は、ブダペストの中心地でもあるアンドラーシ通り、現在のオクトゴン駅近くに居を構えたかと思えば、ブダペストの聴衆が彼の作品に対して良い評価をしなかった際、彼は人を避けるように、ブダペスト郊外の静かな、そして寂しげな場所を選び、隠遁生活を送る。そして、再婚後は工業地帯を避け、バラのII区と呼ばれる閑静な住宅街で作曲活動が続けつつ、国外に移住の可能性を探っている。

音楽作品も私生活も公生活も自分の意志に殉じて、時代に抗って生きた人なのだと思う。

次は、バルトークの生まれた現ルーマニアのティミショアラ、コダーイの生まれたガランタ地方にも足を運びたい。

ハンガリーでの留学生生活は3年目になったが、生活の内容はさほど変わらない。外国語の習得と、ピアノ、そして指揮する作品のレパートリーを増やしていくことが日課である。リスト音楽院大学院での生活も今年度で修了予定になる。来年度以降もハンガリーに残り、バルトークの作品を特に集中して勉強していこうと思っている。オーケストラも作りたい。将来はバルトークの作品や邦人作曲家の作品を海外で演奏できる指揮者になりたい。

最後に、ハンガリーで出会った全ての人、また日本で応援してくれている仲間、先生方、そしてなにより母親に感謝して、これからのハンガリーでの生活が、より一層充実するよう励んでいきたい。

(はらぐち・しょうじ)

留学生

留学生自己紹介

プラスチック膜が薄いハンガリー

BALASSI INTÉZET

田中ちひろ

私は今ハンガリー語を身につけようと四苦八苦している。ハンガリーへの道のりは、大学2年生の冬、ハンガリー刺繍の本を新宿紀伊国屋書店の手芸コーナーで手にしたときに始まった。色使いといい、モチーフといいすべてが私の心を惹きつけて放さなかった。一目惚れというやつである。傷心の日々にあった私は、のめり込めるもの欲しさからハンガリー刺繍に白羽の矢を立てた。「これを好きになって、これに基づいて将来を決めてやる」といった心持だったろうか。こういう表現をするとなんだかな、という感じだが、出会いにおいて大切なのはタイミングである。

美術史を専修し、とくにイスラム美術に興味を傾いていた私は、自分の好きなものを同時に研究してしまえという魂胆のもと、「ハンガリー貴族刺繍におけるオスマン文化の影響」というテーマで卒業論文を書いた。しかし、悲しい出来に終わった研究も少し形にしたいと、ハンガリーでの大学院進学を目論んで来た。しかし、今思うところがあり、先は五里霧中だ。大学院進学を諦めるにしてもここにはまだ居たい。ハンガリー語が少しずつ分かりかけてきたところで帰国してしまうのは惜しい。が、どういう形で滞在許可を獲得し続けるか、目下の検討事案である。

まあ、そんなことはいずれ結論のことである。先月、とある所へバスで行こうとした私は、降りるべき停留所が不確かになった。運転手さんに目的地を伝え、バスが目的地周辺まで行くことを確認して乗り込んだ。降りるべきバス停がおそらく近づいてくると、運転手さんはバスの中程までわざわざ席から降りてきて、周囲のお客さんに確認し始めた。すると、バス中のお客さんはみんな一緒になって話し合い、最善の答えを弾き出し、降りるバス停を教えてくれた。運転手さんから「その子に道を教えてあげてな」と声をかけられたおじいさんは。「OK、

OK、その上まで連れていくよ」と答え、私を近くまで導いた。途中、「日が射してきたな」、「もう春ですね」なんて会話をかわしながら。なんとまあ、穏やかな、心通う瞬間だった。

最近読んだ梨木香歩のエッセイ『不思議な羅針盤』のなかにプラスチック膜という表現があった。それは私たちが家から外に出るときに纏う保護膜のようなもので、周囲に溢れかえる情報、感情、その他諸々から私たちを守ってくれる。そしてプラスチック膜は、見知らぬ人と不意に言葉を交わすときに破れ、私たちはその膜を抜け出して人とかわりあう。梨木香歩はこのプラスチック膜の装備を脱ぎ捨てる瞬間の心地よさに思いを馳せている。

ハンガリーの人はプラスチック膜が薄いのではないかしらん、あるいはコントロールがとても上手なのではないかしらん、はたまたもと膜なんて無いのかも、などと私は思っている。

メトロが突然止まり、振替輸送が始まった時にバスの行き先を確認しあう見知らぬ人同士。バスから降りるおばあさんを助けるために伸ばされる手のすばやさ。マルギットシゲットで寒空の下、待ちに待ったバスが来たときの一体感。スーパー等のレジで自然に花が咲く四方山話。こういった瞬間のなんと多いことか。ごくごく自然に始まる会話、見知らぬひと同士の心安さ。そして、そういう瞬間、見知らぬひと同士はとても楽しそうに話すのだ。私も会話に混ざって、そこにいる人全員と友達になりたい!といつも指をくわえて見ている。プラスチック膜がガチガチに固まってしまった私はそこに至るまで大変な努力を要する。

何故こんなに、とっさに心通わせられるのかしらん、一足飛びで心が近づくのかしらん、と思う。これがプラスチック膜の柔らかさ、制御のうまさなのだろう。本当に素敵な特性だと思う。すごく人間らしいということ

留学生

でもあるのだから。もちろん、その柔らかさによって傷ついたり、苦しんだりすることもあるのだろうけれど。

そういえば、最近ハンガリーの友人から『おもひでぼろぼろ』のDVDをもらった。作中、ハンガリーの音楽が使われている。「百姓の音楽好きなんです、俺百姓だから」と新米百姓の青年が車のカセットで流す、そんなシーンだ。そのほかのスタジオジブリの作品はもう何度も飽きるほど観たにもかかわらず、『おもひでぼろぼろ』だけは今まで一度も観たことがなかった。ハンガリーの



曲が流れる作品だけを今まで観ずに来て、ここハンガリーで初めて見ることになるのは、なんだか不思議な縁だなあと、思ってしまう。

作品は、田舎を持つことに憧れていた夕エコが休暇を利用して山形へ紅花摘みの手伝いに行く夏の話だ。姉ナナコ、ヤエコとの思い出話によってよみがえった記憶をきっかけに、小学生5年生の自分も山形へ連れて行くことになる。ささいな瞬間、瞬間に小学5年生の頃をふと思い出す。おねだりして買ってもらった銀座千疋屋のバイナブルがおいしくなかったこと。ヤエコ姉からのおさがり、エナメルの手バッグをめぐる苦い思い出たち。最初に最後、お父さんに頬を張られた日のこと。村人1の役に全身全霊をかけて挑んだ学芸会。

そうした思い出が呼び起こす小学5年生という年頃もまたプラスチック膜が凝り固まっていく前なのだと思う。それがために、毎日の些細なことに心が揺れて、傷付き、打ちのめさる。けれど、いや、だからこそ、毎日鮮やかで、「雨の日と曇りの日と晴れと、どれが一番好き?」、「く、曇り」、「あ、おんなじだ!」なんて得も言われぬ素敵なやり取りが生まれ、さらにそのささやかな一致に秘められた素晴らしさを見逃すことなく、天にも昇る気持ちになれるのだろう。

(たなか・ちひろ)



緑の丘補習校



小学校の6年間を振り返って

上杉 なつき

私の小学校生活の6年間を振り返って、最も印象的だった出来事の一つ、去年起こったハンガリーの難民問題について書きたいと思います。

私がハンガリーに来てから、家族で何度か旅行をしました。飛行機に乗ってフランスやイギリスにも行きましたが、クロアチアやオーストリア、ボスニアへは車で行きました。日本は島国なので、飛行機や船に乗らないと外国には行けません。でもハンガリーはユーラシア大陸にあり、他の国と陸続きで、車で外国へ行けます。更に、ハンガリーはEUというヨーロッパの仲間国の一つなので、EUの仲間国同士なら、パスポート無しで出入りできます。私がオーストリアに行った時も、オーストリアはEUの仲間なので、パスポート無しで入国できました。

去年の夏、シリア難民の問題が大きくな

りました。陸続きということ、そして、ハンガリーがEUの東のはしにある国なので、とにかくハンガリーに入って、ここからもっとお給料のいいドイツなどを指すため、難民がたくさん入ってきたと聞きました。ですが、あまりにもたくさんの難民が入ってきたので、ハンガリー政府は国境にフェンスを作ったそうです。

私は、フェンスを作ることに賛成です。なぜなら、難民が大勢ハンガリーに入ってきたら、犯罪が起こると思うからです。しかし、フェンスには賛成ですが条件があります。

私は、前にスティーブ・ジョブズという人の伝記を読みました。彼の両親はシリア難民で、彼は家族と共にアメリカに渡ったのです。そして彼は、アメリカでアップルという大きな会社を立ち上げ、大成功をおさめました。なので私は、難民に試験をして、スティーブのように才能がある人だけをハンガリーに入れたらいいと思うのです。でも、私はこの前、漢字テストで失敗しました。

難民の一生を決めるのに、私の漢字テストのように、失敗するかもしれない試験では、やはり選ぶ方法として問題があるかもしれません。一番良いのは、難民が自分の国から逃げてこなくてもいいように、シリアなどが、平和になることだと思います。私は日本で、カトリックの小学校に通っていたので、「祈る」ことを学びました。世界平和のようなものすごく大きな問題に関しては、小学生の私は祈ることしか出来ませんが、難民問題に関しては、祈ることだけでなくもっと行動できると思います。補習校のパザーに協力することもそうですし、難民支えんの募金活動に協力することも出来ます。姉の学年では、難民キャンプに飲み水などを配りに行ったそうです。これからも、自分の身の周りのことだけでなく、もっと広い世界に目を向けて、考えて行動したいと思います。

(うえずぎ・なつき)



補習校での6年間

坂井 香里奈

「ちょっと、こわいなあ。」

これが、補習校に通う最初の日に、玄関を入りながら感じたことです。母と一緒に教室に向かった時も、とてもふるえていました。私は、1年生の2学期から補習校に通い始めたので、最初は他の人と友達になるのに少し時間がかかりました。6年の間には、補習校をやめてしまった友達や日本へ帰ってしまった友達もいて、さびしくなった時もありました。でも、一人で勉強するのではなく、クラスメイトと授業を受けるので、他の人の意見を聞くことができ、おもしろいことや納得させられることもたくさんあ

りました。

中学年になると、補習校とハンガリーの学校の両方に通うのが辛くなってきました。日本語で勉強していく上で一番難しかったのは、漢字の学習です。1年生の時、まだ80字しか覚えなくてよかった漢字も、6年生が終わる頃には、1006字も覚えなくてはならなくなっていました。一方で、音読学習は、みんなと一緒に読んだり、他の人のアドバイスを受けることができたので、知らず知らずのうちに楽しくなり、読むことも上手になったように思います。学習発表会に向けての練習でも、みんなで励まし合って頑張ることができました。毎年、色々なことに挑戦したので、3、4回目からは緊張しなくなりました。

私は、これまでに一度だけ補習校をやめたいと思ったことがありました。しかし、「もしここでやめてしまったら、日本語はもう話せなくなって、読み書きもできなくなってしまう。」と、自分に言い聞かせて考え直しました。それだけは絶対に嫌だったので、この6年間、兄と一緒に頑張って通い続けました。中学生になると、学習内容は小学校よりもずっと難しくなると思います。私と同様に二つの学校で頑張っている仲間と助け合いながら、中学校では苦手なところも克服していきたいと思っています。

(さかい・かりな)



緑の丘補習校



6年間、補習校に通って

桑名 真生

この6年間、補習校に通って、本当に良かったと思います。初めて学校に入った時、「何でここに来たのかな」、「何をやる所なんだろう」という印象で、てっきり母の仕事場だと思っていました。

そこで自分が日本語を勉強する所だとわかった時には、家に帰りたくて泣きそうだった事を覚えています。何故かと言うと当時の僕は、何かのアニメをテレビで見た時に「学校」と言う場所や「学校」と言う言葉に対して良い印象を持っていませんでした。でも、初日の1時間目の授業の後、その怖さが消えて面白くなりました。しかし、それでも僕は小学4年生の頃まで補習校を真剣に考えていなかったで、最初は、補習校に通う事は無駄だと思っていました。「日本語を話すだけで良いのではないか。」とっていて、読み書きには全く興味がなく、覚えたくありませんでした。当然、漢字と音読は、だいぶ遅れてしまい、あまり上



補習校での思い出

横田 阿檀

ぼくは、補習校に5年生から始めました。一番良かった事は、新しい友達ができた事です。楽しかった思い出は、パザーとかるた大会です。6年生の時のパザーでは、同じクラスの真生と一緒におもちゃを売りました。ぼくは、売るために、家から使わなくなった車のおもちゃを持って行きました。真生と協力して楽しみながら売りました。でも、困った事もありました。例えば、英語でしか話せない人が来た時です。真生と二

手ではありませんでしたが、それでも通っていて楽しい事がありました。一つ目は、カルタ大会です。結果は負けてしまって、すごくイライラしましたが、実際はカルタを初めてやったので仕方がないと思った反面、あの頃の僕は負ける事が嫌いだったので、とても悔しかった事を覚えています。でも今は、あの頃より多くのカルタがとれるようになったし、勝ち負けはあるけれど、普段対戦する事があまりないので、わくわくドキドキしながら取り合い、とても熱くなれるので楽しんでいます。二つ目は、2年生の頃の担任だった宮城先生と平仮名やカタカナや漢字を覚える時間が、とても楽しかったです。例えば、「み」を覚える時に覚えるのが難しいと思っていたら先生が「先生の名前は『みやぎ』だから、『みやぎ』の『み』と覚えるとわかりやすいよ。」と、すぐに覚えられるように教えてくれた事が、たくさんありました。5年生になった時、もっと日本語を知りたくなり、少しずつ勉強し始めるようになりました。授業中も先生の話をしっかり聞き、音読や宿題も前よりも

っときちんとやるように心がけました。そして、その年の夏にブダペスト日本人学校へ1か月半の間、体験学習に通い、日本の環境の中で日本の文化やハンガリーの学校には無い、色々な科目を知る大きなきっかけができました。今では音読も漢字も、続けて頑張つて勉強しています。小学校最後の学習発表会に向けて、時間を見つけて練習しています。以前のように遊んでばかりで日本語の学習を怠けるのではなく、宿題やその他に出来る事から毎日とは言いませんが、少しずつ課題をやっています。小学校はこれで卒業し、中学生になる事に緊張しますが、とても楽しみでもあります。これからも日本語をしっかりと学習し、自分の将来の為に役立てたいと思います。最後に6年間、ぼくをサポートしてくれた先生方や同じクラスのみなさんへ、感謝の言葉を伝えたいと思います。本当に、ありがとうございました。

(くわな・まさき)

人ががんばって英語で会話をしました。また、2、3さい位の子が一人で、ぼく達の売り場に来た事もありました。後で、その子の父親が探しに現れ、ほっとしました。おもちゃは、ほとんど売ることができました。かるた大会では、「俳聖かるた」という、かるたを使って、勝負をします。ぼくは、「俳聖かるた」は、補習校で初めて経験しました。俳聖かるたは、普通のかるとちがいます。読み上げる17文字の俳句の中の、下の句12文字が、かるたに書かれています。そのため、最初の5文字と、後の12文字を一緒に覚えていれば、それだけで勝てる可能性

が上がります。5年生で参加した初めてのかるた大会では、まだ、覚えていなかったのですが、6年生になり、クローク先生が、かるたを貸して下さったので、家で覚える練習をしました。その結果、5年生の時よりもよく取れました。しかし、ほとんどの対戦相手が俳句をたくさん覚えていたので、苦戦しました。結局、4人中3番でした。中学生になると、今度は、俳聖かるた大会から百人一首大会に変わります。そこでも、がんばろうと思います。

(よこた・あだん)





2016年度リスト音楽院日本人留学生 ディプロマ(卒業)コンサートスケジュール



新井 沙紀子 (ピアノ, 大学院)

4月23日(土) 16:00 ショルティホール

曲目: バッハ: トッカータ長調 BWV916, リスト: バラード No.2,
バーバー: ピアノソナタ Op.26, リスト: 白鳥の歌 S.560「セレナーデ」
超絶技巧練習曲 S.139「鬼火」「雪かき」、スペイン狂詩曲 S.254



藤原 新治 (ピアノ, 大学院)

5月4日(水) 19:00 旧リスト音楽院ホール

曲目: J.S.バッハ: フランス序曲 口短調
M.ラヴェル: クープランの墓よりプレリュード、リゴードン、トッカータ
F.リスト: ピアノソナタ 口短調



萩原 由理奈 (ピアノ, 大学院)

5月20日(金) 16:00 リスト音楽院ショルティホール

曲目: ベートーベン: ピアノソナタ No. 21 ハ短調
スクリャーピン: ピアノソナタ No.5 嬰へ長調
メンデルスゾーン: ピアノトリオ
共演: 井上 奈央子(ヴァイオリン)、中条 誠一(チェロ)
メンデルスゾーン: ピアノ協奏曲
指揮: メドヴェツキー・アーダーム 共演: アニマ・ムジカ室内合奏団



原口 祥司 (指揮, 大学院)

5月23日(月) 19:00 リスト音楽院大ホール

曲目: コダーイ作曲: ガランタ舞曲, ハイドン作曲: トランペット協奏曲 変ホ長調
シューマン作曲: 交響曲第4番 二短調 作品120
サローキ・バラージュ(トランペット), ハンガリー放送交響楽団



菅原 望 (ピアノ, ピアノリストコース)

○ピアノソロプログラム 6月13日(月) 19:00 リスト音楽院ショルティホール

曲目: バッハ=ブゾーニ: トッカータとフーガ 二短調 BWV565
シューマン: フモレスケ 変ロ長調 Op.20
リスト: 愛の夢, メフィストワルツ第1番「村の居酒屋の踊り」
リスト: 巡礼の年第2年「イタリア」よりソナタ風幻想曲「ダンテを読んで」

○協奏曲プログラム: 6月19日(日) 19:00 リスト音楽院大ホール

ラフマニノフ: ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 Op.18
共演・指揮: 未定



中嶋 弥生 (ヴァイオリン, 大学院)

6月15日(水) 19:00 リスト音楽院ショルティホール

曲目: J.S.バッハ: 無伴奏バイオリンソナタBWV1001 第1,2楽章 アダージョ、フーガ
L.ワイネル: ピアノとバイオリンのためのソナタ第2番 嬰へ短調
C.サンサーンス: ワルツカプリス 作品52
W.A.モーツァルト: バイオリン協奏曲第5番 イ長調
共演: 島貫 愛(ピアノ)、リスト音楽院有志オーケストラ 指揮者: ネーメシ・ゲルゲイ

注意: 無料コンサートですが、リスト音楽院大ホール及びショルティホールでの公演はリスト音楽院本校舎内にあるチケットセンター(1061 Budapest, Liszt Ferenc tér 8.)でチケット予約・受け取りする必要があります。
Email: zeneakademia@interticket.hu Tel: (06-1) 321-0690

編集部からのお知らせ

「ドナウの四季」は今号で30号を迎えました。次号から印刷版による配布を止め、PDFによる電子媒体による発刊のみとします。印刷費用と配布に手間暇がかかるためですが、すでに世の中は電子媒体で多くのコミュニケーションが行われる時代になりましたので、不都合がないものと判断しました。これまで、印刷版を楽しみにしていらっしゃる方には申し訳ありませんが、これからは各自必要に応じて、印刷してご覧ください。

すでにPDF版を送付している方々にはとくに送付先をお知らせいただく必要はありませんが、新たにPDF版の送付を希望される方は、編集部あるいはこれまで配布を受けていた方に送付先のアドレスを伝え、ファイル送信を受けてください。

電子版のみへの移行に伴い、編集方針が変わります。ページ数の制限がなくなりますので、記事や写真の容量に余裕ができました。写真の解像度も、印刷版では高解像度の写真をお願いしていましたが、これからは低解像度のファイルでもかまいません。

原稿の締切りはこれまでと同じように、以下の通りとしますが、締切り日にかかわらず、原稿は通年、受け付けます。必要に応じて、臨時号を出します。皆様の原稿をお待ちしています。

新春号(1月初旬)	12月10日(前年)
春季号(4月初旬)	3月20日
夏季号(7月初旬)	6月20日
秋季号(10月初旬)	9月20日

原稿は1頁につき、2500字未満とします。写真が入る場合には、200-300字ほど字数を減らす必要があります。2ページ建ての場合は、概ね4000字前後で、写真が2枚入ります。写真の数が増える場合には、字数を比例的に減らす必要があります。

原稿は10.5ポイントでWordあるいは一郎ファイルをお願いします。EXCELファイルでの原稿提出はご遠慮ください。また、特定の書式は避けて、通常設定のテキストをお願いします。図表、写真は原稿ファイルに貼り付けずに、別ファイルで送ってください。

これまで通り、「ドナウの四季」はバックナンバーとともに、以下のサイトでアップロードされます。
<http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。

2016年3月

「ドナウの四季」編集長 盛田 常夫

SAKURA DESIGN

CI、広告、ロゴ、ホームページ等
名刺1枚からご希望の言語にて
デザイン致します。

各種パッケージ、インテリアのデザイン、
内装工事、翻訳から印刷まで
幅広く受け承っております。
お気軽にお問い合わせ下さい。

SAKURA DESIGN: info@innerdesign.hu
Inner Design Group · 1021 Budapest, Bognár utca 7.
Tel/Fax: 1-200 3213 · Mobile: 06 20 480 4431

www.innerdesign.hu

Propart Hungary Bt.

各種コンサート企画・製作・国際交流イベントを中心とした業務の運営。ハンガリーを拠点にグローバルな企画・マネージメント展開を行っています。お気軽に、御相談下さい。

- ・音楽企画/マネージメント
- ・若手音楽家の育成サポート
- ・国際交流事業企画運営
- ・留学/音楽研修サポート
- ・短/長期賃貸物件仲介
- ・各種通訳
- ・翻訳サポート
- ・買い/レンタルピアノ仲介
- ・輸入/輸出楽器仲介

ハンガリー国内出張演奏、
各楽器講師紹介なども随時承っています。

Propart Hungary Bt.
Address: 1089 Budapest, Kőrös utca 25. II/6
Tel&Fax: +36-1-786-7846
Mobil: +36-70-3815548
e-mail: propart@chello.hu
web: <http://propart.client.jp/>

日本人学校

笑顔で楽しく踊る

「笑顔で、楽しく踊ること」。正直なところ、初めはあまりハンガリーダンスを楽しみにしていませんでした。あまり踊ったりするのが好きではなかったからです。ですが、練習を積み重ねていくうちに楽しくなりましたが、本番が近づくとつれて、不安な気持ちにもなりました。「ここまでやってきたらやりきろう」と最後まで踊りきることができましたが、たくさんの苦労がありました。

1回目の練習。講師の方を招いてのハンガリーダンス練習が行われた時は、歌や最初の場面を重点的に練習しました。その次の日から、朝の30分間を使って、前の練習の動画を見ながら改善点を見直し、みんなで意見を出し合いました。

「ステップを小さくしたらいいんじゃない」、「もっとリズムに乗って踊った方がいいよ」と、話し合いながら練習をしました。また、「見ているお客さんも楽しんでもらえるハンガリーダンスにしよう」という目標もありました。こ

の二つの目標の共通点は、「自分たちが楽しめない」と何も始まらない」とことです。これを忘れず練習を重ねました。

難しいステップなどを習った時は、「こんなのできるの」と愚痴をこぼしそうになったこともありましたが、上達していくにつれて、出来た時の喜びはとても大きいものでした。もちろん反対のこともありました。1回目はできたのに2回目はできなかった時、とても悔しい思いをしました。だからこそ、本番で後悔しないよう練習しました。

その後、次々に新しいステップを覚えていくと、一つ一つの細かな動きを忘れてしまって、簡単なことではありませんでした。また、そこに衣装を着るので、動きが難しくなる分だけがんばらないといけませんでした。

自分達だけの練習の時は自分たちで目標を立てて取り組みました。先生方からは、「終わった後、息が上がっていないならまだできる」、「多くの人が下を向いているから、もっと堂々

小学部6年 原田 康平

としていたほうがかっこいい」と声を掛けられました。このことを忘れず、ぼくたちは本番までより良いものを目指して、練習を重ねていきました。

本番当日。ぼくは、「間違えないようにしよう」と多少緊張していました。ダンスが始まる直前に先生から、「間違えてもいいから、楽しんで踊りなさい」と言われ、ぼくは、「後悔しないよう踊ろう」と思い直しました。それで、少し緊張がほぐれました。

本番のステージで、始めた直後にちょっとしたミスがありましたが、最後まで大きなミスはなくてよかったです。最後の礼をして顔を上げた時、カメラのフラッシュがたくさん光っていました。その光景を見た瞬間、達成感でいっぱいになりました。自分でも心残りなく、全力を発揮できてうれしかったです。また、本番は自分の思っていた以上に楽しむことが出来ました。

(はらだ・こうへい)



努力とあきらめないことの大切さ

青空の下、すごく暖かい気候の中で始まった運動会。たくさんの競技の中、一番緊張し、達成感を得られたのは組体操だ。その技の中でも、補助倒立では、他の技と比べものにならないくらい緊張した。その理由は、運動会の前にあった。

二人技ではペアがいないと成り立たない。僕のペアは5年生の林正剛君だ。正剛君と、たくさんある二人技を頑張って練習した。けれども、練習で成功したことは、一、二度あるかなにかぐらいだった。運動会の前日の練習でも、やっぱり倒れてしまった。休み時間も、たくさん練習を積み重ねたが、この休み時間でも成功しなかった。そんな中途半端な状態で、最後の練習が終わった。その日の夜は、補助倒立のことで頭がいっぱいになり、あまり眠れなかった。

そして迎えた運動会当日。たくさんの人が見守る中、本番が始まった。どの競技でも、補助倒立のことが頭から離れない。そして、あっという間に、昼食の時間になった。この時に、

早く弁当を食べ終えて、正剛君を探した。「練習をするチャンスは今しかない」と思って、必死になって探した。5分程度探したら、正剛君を見つけた。

「倒立の練習をしよう」と声をかけた。すると、「やろう、やろう」と明るい声で返してくれた。少しの時間しかなかったが、正剛君と一緒に、できるだけ多く練習した。すると3回連続で成功した。そして、正剛君は「コツを今つかめた」と言った。その言葉を聞いて、とても頼もしく感じた。練習できる時間は、あっという間に終わってしまった。補助倒立を成功させられる希望が見えてきた。僕は、すごく安心した。会場に、組体操が始まる、という放送が流れた。

「ドクドク」組体操の緊張で、自分の心臓の音がいつも以上によく聞こえてきた。

補助倒立以外の技は心配なかったから、すごく堂々と演技ができた。明るい曲の中、たくさんの技を披露した。でも自分の予想ほど緊張はしなかった。二人技をするところまで来

小学部6年 高橋 勇吹

た。二人技も、練習通りに演技をすることができた。そしていよいよ、補助倒立の時が来た。周りは静かだった。成功させられるか、すごく心配し緊張したけれど、僕は勇気を出して、練習通り力いっぱい地面を蹴った。すると、正剛君はしっかり支えてくれて、補助倒立は見事に成功。その時、僕はすごく晴れやかな気持ちで、うれしさと達成感を得ることができた。他の技も、たくさんの人と協力して完成させることができ、とてもうれしかった。今年の組体操は大成功だったと思う。

本番前に練習をしたからこそ、学校の練習ではつかめなかったコツをつかむことができた。だからこそ、努力は大切なのだと思えた。最後まで練習を続けたからこそ、成功させることができた。だから、あきらめない強い気持ちも大切だと分かった。

今年の運動会で学んだ、「努力とあきらめないことの大切さ」を生かして、これからの学校生活を頑張っていきたいと思う。

(たかはし・いぶき)





コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

池田信夫「21世紀最初の10年ベスト経済書」第2位にランク
「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン

コルナイ・ヤーノシュ自伝

—思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】

◆好評発売中！ ◆定価 4935 円（税込）◆A 5 判／ISBN 4-535-55473-0 日本評論社



体制転換 の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■ 新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■ 定価 3045 円（税込） A 5 判

■ ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

「週刊文春」(米原万里)、「週刊ダイヤモンド」(北村伸行一橋大学教授)で書評。

ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。大きな足跡を残した科学者たちの評伝。

体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。

日本経済新聞(2010年3月21日)ほか、多数の書評。

旧来の定説を覆し、新たな知見を広める革新の書。

盛田 常夫著

日本評論社

定価3800円

